

## 特別講演

主催 国際医療センター 皮膚科

後援 医学教育センター 卒後教育委員会

平成25年7月22日 於 国際医療センター C棟2階 会議室

## 分子標的薬による皮膚障害の症状と対応 ～EGFR阻害薬を中心に～

清原 祥夫

(静岡がんセンター 皮膚科)

近年、がん化学療法において多くの分子標的治療薬が導入されている。これらは細胞の増殖・分化に関わる特定の分子をターゲットにしているため従来の殺細胞性の抗悪性腫瘍薬に比べ、特殊な皮膚の副作用が発現する。これらに対してこれまでにない皮膚科医の対応が求められている。

今回、これら多数の診療経験を持ち、この領域の第一人者として活躍されている当埼玉医科大学出身者の清原祥夫先生をお招きし、ご講演をいただいた。

これら分子標的治療薬の皮膚症状のうち予後改善の可能性を示唆するものがあり、ただ原因薬を中止するだけでは不十分である。その治療効果と副作用の、いわゆるリスク&ベネフィットバランスが考慮されなければならない。事実、皮膚症状が高度な患者のほうが、皮膚症状が軽度の患者よりも、抗腫瘍効果ならびに予後の改善傾向がみとめられている。しかもそれは医療者のみならず患者自身が理解し、納得していることが重要である。例えば皮膚症状は、外見上に影響することや日常の生活に密着した手足の副作用であり、敬遠される場合も少なくないが、致命的な副作用ではないことや種々の予防や対策の方法も含めて説明する必要がある。その上で、この副作用の発現と治療効果のバランスを患者自身がどのように考えるかについて

確認する必要がある。そのためには皮膚科医が率先して抗がん剤処方医師、看護師、薬剤師などの多職種に連携して予防、対策、管理を行うことが強く求められる。すなわち、多職種チーム医療の必要性が強く問われている。

今回は肺がん、大腸がん、乳がんなど多くのがん種で臨床導入されているEGFR阻害薬を中心に、その皮膚障害であるざ瘡様皮疹、乾燥性皮膚炎、爪囲炎などについての対策とスキンケアを含めたスキン・マネジメントについて解説していただいた。すなわち、(1)皮疹は高頻度だが重篤なものは稀、(2)皮疹は積極的な対応でコントロール可能、(3)皮疹は抗腫瘍効果の表れであり、効果の期待あり。(4)アレルギー性ではなく、中毒疹・容量依存性であり、つまり再使用可能である。よって、基本的にはざ瘡様皮疹や爪囲炎にはvery strong以上のステロイド剤の外用が有効であり、ミノマイシンの内服治療も抗菌作用のみならず抗炎症作用を伴っており、有効であると話された。また、ミノマイシンの予防投与で皮膚障害は半分以下にできると説明された。遅行性であるがアパダレンの外用も有効であり、ステロイド離脱の際に使用する機会があると説明された。一方、乾燥性皮膚炎については、通常の保湿剤の外用でよいと話された。